

当院の超音波検査手技の精度管理の取り組み

◎林 大貴¹⁾地方独立行政法人 岐阜県総合医療センター¹⁾

【はじめに】超音波検査は他の検査と比較しても低侵襲かつ、どこでも誰でも簡便に検査を行えるという利点がある。しかしその一方、検査者の技量により検査結果に差異が生じ、最悪の場合には治療方針に大きく影響を与える可能性があるという欠点がある。20年来の経験者、5年ほどの経験者、配属されたばかりの新人では、もちろん知識も経験値も圧倒的な差があり、診断に直結するような超音波画像の描出へのアプローチも異なるであろう。さらに、超音波検査件数の多い検査者の方が経験値も蓄積され、診断に直結し得る超音波画像を描出できるであろう。超音波検査をする上で、疾患や解剖が頭に入っているのが大前提ではあるが、いくら教科書を開いて勉強しようとも、その疾患を判読できる画像が描出できるか否かは経験値が物を言う。しかし、そのように言い切ってしまうえば若手の成長の妨げとなり検査室全体のレベルアップには繋がらない。経験値に関係なく誰もが同じエコー画像が描出でき、結果への解釈が統一され臨床側に結果の根拠となるエコー画像を提示できる事が理想ではあるが、現実的には難しく各施設で超音波検査における検査者間での精度管理に難渋するのではなかろうか。

【教育の実際】当院の超音波検査はISO15189に沿い、新たな領域への検査を開始した研修者と1人で検査を完遂できる要員で日々の業務を行っている。研修者は、チェックリスト、超音波検査評価表、スキルマップを使用し教育を進めていく。

チェックリストにて基本的な解剖や計測方法、病態などの知識的な勉強をし、評価者が理解度の確認をする。

超音波検査評価表は技術的な評価に使用し、独り立ちまでの検査プロセスにレベルを設定し、レベル毎に検査人数、検査時間が決められている。研修者は、指導者に段階に応じた確認を受けながら検査を実施する。決められた人数を検査したら評価を行い、合格であれば次のステップに進み、不合格であれば所定の検査数を再履修し再度評価してもらう。段階的にステップアップすることにより研修者も技術、知識ともに成長することができる。

さらに、スキルマップでは、チェックリストで確認した項目を1ヶ月後、3ヶ月後、6ヶ月後のタイミングで評価者が確認し、学習したことの記憶もれや解釈の差異をなくし、基本的な知識を検査室内で共有している。当院ではこれらの様式の進捗状況を週に1度、超音波検査室全体で共有している。全体が把握することで進捗状況が滞ることは少なくなり、研修者が研修中の領域への検査に入りやすい環境作りにもなっているはずである。

【まとめ】当院では前述のように3種類の研修様式を用いて、1人で検査に入る上での最低限の知識と画像の描出について、誰が検査をしても評価が変わらない様に標準化に取り組んでいる。教育される側としても、どこから勉強していいかわからないなどの不安や、自分の理解できていること、できていないことが可視化でき、基礎を学ぶ上での道標となっている。しかし、検査者は皆、見た目も違えば性格も違う。自ら進んで勉強し成長していく者、私の様に指導者にお尻を叩かれないとなかなか重い腰が上がらない者と多種多様であり、教育する側も日々苦慮していることであろう。当院の研修様式は道を外れることなく、ある程度の基準まで成長させてくれる。研修様式について各々で感じ方は異なるだろうが、どこかのステップで超音波検査へのやりがいを感じる一助になれば良いのではなかろうか。同じ超音波検査に従事するものとして、施設内のみならず施設間でも今後さらに知識・技術に対する教育方法について共有やアップデートがなされ超音波検査の向上・発展に努めたい。